

老舍『猫城記』試論

渡 辺 武 秀

On Lao Shê (老舍)'s "Mao ch'êng chi (猫城記)"

Takehide WATANABE

概 論

この作品は篇猫人の故事。猫人住在火星上の猫国。作者在前部分详细地描述了猫人的性格。第一，猫人们吃“迷叶”，吃了迷叶就不想做工种地，所以他们都是特别懒惰的。第二，他们总是以自己为中心，没有对别人的同情心，所以他们都非常贪婪。如果人民都是这样的性格，国家将会成为怎样的状况？这个作品本着这个观点上描写的。我分析了这个作品之后，渐渐地明白了一些作者的意图。我们人类呢，心里上也有一部分跟猫人一样的性格。猫人的性格吸引力特别大，一不小心就容易成为“猫人”。大家自己应该小心点儿吧！

序

この『猫城記』は『現代』第一巻三期(1932・7)の「編輯座談」に『猫城記』の掲載予告の文章が掲載され^(註1)、作品の連載は次の号から始まり、連続して第二巻六期(1933・4)まで行われ完了した。単行本としては、連載が完了した年の八月に、現代書局より出版されている。

この『猫城記』という作品が、この後どのような運命をたどったかについて、『猫城記』の五十年間の「評価」として簡潔にまとめた日下恒夫氏の、次の文章に窺うことができる。

発表以来五十年間をまとめて次のように言うことができる。発表直後はともかく評判作であった。中華人民共和国成立以降三十年は「全面否定」の時期、とりわけ「文革」中はそうであった。一九八二年以降、再評価の動きがでてきた。もちろん、評価といい、否定といっても、その理由は、小説の出来とか文学として成功しているか否かに全く関係がない。先進分子、共産主義者を嘲笑、誹謗、中傷したという事実から否定するか、暗黒面を描き出し、社会の矛盾を抉り出した実事求是の「愛国作家」として評価するか、この二つである。結局のところ、この作品は三十年このかた、文学として読まれた

ことがないということである。老舍の小説を云々するとき、いつも中国ではこの作品の存在が問題になってきた。今後も問題になることであろう^(註2)。

この文章から、老舍の『猫城記』が中国でどのように扱われてきたかを窺うことができる。

この『猫城記』の評価の流れがこのようであれば、できる限り作品に接近し、この作品はどのような創作方法で作られたものか、作者はこの作品でどのような試みをしているのか、これを書くことで何を主張したかったのか等を作品から明らかにすることもあながち無意味ではないように思う。

さて、この『猫城記』という作品であるが、この作品は「私」がロケットで火星に不時着した場面から始まる。火星には、猫の容貌をした人間が住んでいる国があった。この猫の国で、主人公である、地球の中国から来た「私」は、猫人、猫の社会の種々な面を観察したり、猫人と交流したりする。

つまり、ごく簡単に言えば、この『猫城記』は、猫人の住む国での「私」の、猫人との交流、猫人や猫社会の観察の記録ということになる。

このような作品であるから、当然ながら「私」の関心はあらゆるものに及んでいる。猫社会の

平成4年10月17日受理

* 一般教育講師

「学校」「教育」「図書館」「学者」「政治家」……などである。

したがって、この小論では、種々の「私」の関心のうち、いくつかの対象を取り挙げ分析し、○猫人の性格とはいったい何を象徴しているのか、

○作者は猫国のそれを取り挙げて語ることで、猫国、猫人の何を問題にしているのか、

○猫社会のそれらは個別的に取り挙げられているようにも思えるのだが、じつは一貫したものゝを根底に持っているのではないか、

などを中心に考えていくことになる。

この考察を通じて、さらに、この時期の作者の創作方法、この作品で主張したかったことなども明らかにしてみたい。

一

いくつかの「私」の猫国における観察の検討にはいる前に、まず作品全体がどのように作られているのか考えてみる。

この作品は二十七回より成っている。

冒頭より第十回までは、見知らぬ国に一人残された「不安」、何が起こるかかわからない「恐怖」といったものが、作品を引っ張る。さらに、猫人と知り合った後は、猫人の「正体」に対する興味ある事項が功みに織り込まれていく。

そして、新たな展開は第十一回の、次の文章に始まる。

ひとめ猫の街を見たたん、どうしてか解らないが私の心の中に一つの言葉が形作られた、この国の文明はもうすぐ絶滅すると⁽¹⁸³⁾。

ここに、結末の猫国の「滅亡」に対する伏線が張られている。

これ以後の、この作品のストーリーの展開を吟味してみると、ある一つのパターンを看取することができる。

猫人或いは猫国の、将来が輝かしいものになる可能性、そこに到達できるように必要な潜在

的な力といったものを例えば『陽』とし、猫人や猫国の欠点、それらが持つ深刻な病根といったものを『陰』とすると、この作品は『陽』から『陰』へ、『陰』から『陽』への微妙な繰り返し、この作品の構成の中核をなしている。

「私」は猫人或いは猫国に『陽』を見いだし希望を抱く。だが、猫国の現実にそれが打ち砕かれてしまい失望する。またどうにか立ち直り希望を取り戻すが、それもやはり、打ち砕かれてしまう。やがてまた、……。このパターンが繰り返されている。このパターンを、或いは比喩的に、「私」の、猫の国のどこかにあるかもしれない「希望」を求めての旅とでも言えるかもしれない。

ともあれ、作者はこのパターンを繰り返し、しだいにトーンを上げ、最終的には希望を完全に打ち砕く猫人の「絶滅」、猫国の「滅亡」という局面に追い込んでいく。

なお、「絶滅」「滅亡」というのは、猫人や猫社会が持っている欠点、深刻な病根といったものが、彼らの持つ『陽』の部分、例えば可能性、潜在力、それらを兼ね備えている人材を侵食してしまった、或いは飲み込んでしまったということになろう。

猫人や猫社会の「絶滅」「滅亡」に立ち会った読者にも、悲しみから深い反省が沸き起こるに違いない。そして、この反省の上に立って、読者も『陰』の部分を検討し、それを克服しなければならないという結論に気づく。

作者の最大のもくろみはまさにここにあることとは言うまでもない。

二

次に注目したいのが、初期の段階で挙げられている猫人の特徴である。

まず猫人が「迷葉」を食べる習慣が紹介される。

(迷葉は)ある日突然外国人が猫国に持ってきて

た。最初はただ上流の人だけが食べられたのだが、後に外国人が猫国に迷葉の木を持ち込んできたので、みんながみんなそれを食べて中毒になった。五十年経たないうちに、それを食べない人は例外となってしまった。迷葉を食べればとても気持ち良くなるし、とても便利である。だが、他の面もある。食べたのち精神は高揚するのだが、手足を動かしたくなくなる。ここにおいて、田を耕すものは耕さなくなり、仕事をする人もやらなくなってしまった^(註4)。

猫人は「迷葉を食べることで、肉体労働を喜ばなくなってしまった」^(註5)のである。

猫人は怠惰で、汗を流そうとしないし、快楽のみ追求するように思われる。

しかも、この迷葉のために他の作物、或いは他の産業も消滅してしまうことにもなる。

二つめは猫人的「自由」を持っているということである。

「掠奪は猫人にとって決して悪いものではない」と言い、続けてその理由を「掠奪は最も個人の自由を発揮するに足るものであり、しかも自由は猫人が持つ有史以来の最高の理想である」^(註6)と述べる。そして以下のように猫人の自由の定義を下す。

猫語の『自由』は、決して中国語のそれとは同じではない。猫人のいわゆる自由は他人を欺くことであり、協力しないことであり、メチャクチャにかき乱すことであり……男の間では直接もののやりとりはしないということは、まさしくここから来ている。一人の自由人は他の人と接触することは許されないのである。お互いに会っても握手もせずキスもせず、むしろ頭を後ろの方に傾けることで、誠意を表す^(註7)。

猫人の自由とは、自己中心のことであり、他人のことをいっさいかまわないことであり、他人を信用しないことであり、他人に対し尊大であることなのである。

だから、「彼らの自由からして五人の兵隊が一緒に三日住んでいれば、人命事件が起こらないことは有り得ない」^(註8)というふうに同胞に対してはひどく残忍になれる。そしてすでに「相惨

殺しあう能力は日に日に大きくなり、殺人の方法はほとんど詩を作るのと同じように巧妙になった。」^(註9)

また、かれらの自由からして、友達関係も「自己中心的であり、自己の利益のために人を利用することがまるで彼が友達づきあいする理由の主な因子であるふうなのだ」^(註10)となってしまう。このことは、逆に自分の利益を求めて、相争うことなど当たり前だということになる。

このように迷葉を食べることによってもたらされる極端な怠惰、また極度の自己中心性、これから引き起こされる非協力性、貪欲な自己利益の追求、果ては罪の意識のない殺人といったものが、猫人の主要な特徴として示される。

この猫人の性格は何を意味しているのか。

表面的には「猫」という動物の特徴を表現しているように見えるが、よくよく考えると、これらの猫人の性格は、我々人間が一方で持っている人間の動物的な本能に近い部分に思い到る。例えば、汗を流して仕事はしたくない、しかし美味しいものは食べたい。この種の虫の良い考えに近いような気がしてくる。働きたくないが利益は欲しい。この虫の良い考え方は、ひいては猫人の特徴として挙げられている掠奪、殺人にもつながることは言うまでもない。

このような人間の、「猫」という動物と共有する本能的な部分を、例えば仮に『獣性』と称すならば、猫人はこれを突出させたものであり、もしかしたらこの作品世界はこの『獣性』を解き放ったらどうなるのかというところで作られていると言えるのではないか。

だが、人間は他の面も備えている。人間が人間たり得ているのは、いわば動物としての「猫」と違うのは、そのような『獣性』を制御、抑制、さらには克服できるところにある。作者のこの言及が、作品の一方にある。

三

以上のことを押さえた上で、さらに、具体的

な「私」の観察、それに対する猫人の小嶋という人物の言及に沿って見ていく。

① 外国人に対する恐怖。

猫人は外国人を恐れている。だが、ただ恐れるだけで、自らはその恐れに対して何もやろうとはしない。この理由を以下のように述べる。

猫国人は外人をやっつけられない。彼らの唯一の望みは、外人たち自身が喧嘩をすることである。志を立て自ら強くなることは、極めて大きな努力を必要とする。猫人はとても利口である。こんなアホらしいことは絶対やらない。だからひたすら大神様に祈る、外国人たちが互いに残殺しあうようにと。猫人は弱から強へと転じるチャンスを持っている。或いは言うべきかもしれない、他の国が自分たちと同じように弱くなるのを見るチャンスを持っていると^(註11)。

外国を恐れないようにするためには、自ら強くなるしかない。しかし、猫人はそれをやろうとする気が全くない。ただ相手が弱くなるのを待っているだけである。

外国人より強くなろうとするためには相当な努力を必要とする。努力をするのは苦しい。それより、待っているのが楽だからである。こういう道を選択するのが猫人なのである。

ただ恐れているだけで何もしないのは猫人の『獣性』であり、動物としての「猫」と同じである。ここに留まらないためには『志を立て、自ら強くなるために努力しなければならない』のである。

② 猫国の自由恋愛

猫国の自由恋愛は外国からもたらされたものである。しかし、猫の国にこれがもたらされると変質を遂げてしまう。

猫国では、旧い世代の猫人は妻のほかにも多くの「妾」を持つことを考え、新しい世代は「自由な結びつき」を主張し、妻のほかにも多くの恋人を持つことを考えている。確かに、猫国では、男女の結びつきが「妾を持つ」というものから、外国の影響を受けた新しい「自由な結合」

という方向に表面的には変わっているように見える。だが、その中身は依然としてなんにも変化していない。

以下は、この原因が何処にあるかの説明である。

私たちはただ『あれ』の問題ばかり拘り、子女の問題を考えなかった。年寄りは一生涯懸命妾を娶り、若いのは一生懸命自由にした。表面上はとてにぎやかに騒いだ、しかし、実際は『あれ』のためにすぎなかったのです。『あれ』の結果、多くの世話をする人もなく、養育する人もなく、教育する人もない、ちいちゃん猫人が生まれました。これがさらに大きな胡麻かしと言われるものです。私の祖父は胡麻かし、私の父は胡麻かし、私は胡麻かし、あの青年たちは胡麻かししました。「責任」は最もイヤな名詞なのです^(註12)。

猫の国では男女の関係からもたらされる快樂のみを外国から取り入れ、その関係にとまなうお互いの責任というものを忘れている。この態度は、本質的には以前の、男性の性欲を満足させるためにだけ存在した男女関係となんら変わるところがないという。

なぜこのようになるのか。個人の責任は、もともと厳しく、重く、それを果たすのは容易なことではない。自由恋愛は自由であるからなお個人の責任は重くなる。ところが、猫人はここを見ることなしに、表面上の男女関係からもたらされる快樂のみにとらわれている。これ故、自由恋愛という依然とは違う男女の結びつきが外国からもたらされても、単に自由とは複数の女性と関係を持つことだとして取り入れてしまっているのである。

この猫人の男女関係は「男の側がどう考えるかによって違っているだけのこと」^(註13)なのである。だから男側からみれば、ある意味では、極めて理想的な方法になっている。しかし、この種の猫人の考え方による男女関係が大きな悲劇を生むことは想像に難くない。この悲劇に関しては、新たに第15回の場面で猫の国の公使婦人の故事として描かれている。

この男性側の理想的な方法を、当然なものとして受け入れ、女性であるはずの公使婦人が守り、同性である女性を不幸にしてしまう。これは同時に女性である自分をも、自分の手で不幸にしていることになる。だが、このことを公使婦人は気づくことはない。この男女関係が依然として存続しているのは、じつは女性側にも問題があることを指摘している。

ともあれ、猫人の自由恋愛は、性欲を満足させるために複数の女性と関係を持つといった『獣性』そのものであり、自由恋愛の根本にあるべき「責任」は忘れられたままなのである。

③ 猫国の学校

第十七回のほとんどすべてに「私」の猫国の「学校」の観察の記録が書かれている。

主人公である「私」が猫国の学校を見に行く。四方は高い塀に囲まれた。がらんとした学校で、「私」は衝撃的な光景を見る。

学校の中には、教師の言うことなぞまるで聞かない小学生がいた。外国人を恐れる猫人の性格であるから、外国人である「私」の存在に気づいた教師は、「外国人がいる」と言って小学生を静かにさせ、にわかに「式」を始める。この「式」で発せられた言葉が「私」を驚かせる。

「今日は諸君が大学を卒業させる日であります。これは何と光栄なことでしょう！」……(略)……校長は続けた。「諸君がこの最高学府を卒業されまことは光栄のいたりであります。諸君はここを卒業されたのでありますから、いかなることも理解でき、いかなる知識もすべて持ったのです。以後の国家はすべて諸君の双肩にかかっております。これは何と光栄なことでありましょう！」(註14)

小学生が大学という最高学府を卒業する、というのである。

さらに、斜め前の学校を覗く。ここの学生は一五、六歳の学生であった。ここでの光景はさらに衝撃的であった。

七、八人の人が一人を押さえつけ、刃物で解剖していた。傍らではさらに学生が二人の人を縛って

いた。これは恐らく生理解剖の実習をしているのだろう、と私は思った。しかし、生きた人間を縛り付け解剖するとはあまりにも残忍ではないか！私は心を鬼にして見ていた。見るならとことん見てやろう。しばらくして、みんなは二人をしっかりと縛り上げ、塀の下に放り投げたが、二人は声も出さなかった。恐らく気絶しているのだろう。解剖している連中は身体をバラしながら、罵っていた。

「おれたちをまだ管理するってのかい、このくたばりヤロウ！」一本の腕が放り出されてきた。

「おれたちに勉強させようってのかい？ 女学生とつきあうのを許さないって？ 社会の暗黒がこんなになっているのに、まだおれに勉強しろだど！？まだ学校であれすることを許さないだど！テメーの心臓をほじくりだしてやる、このくたばりヤロウ！」紅い塊が空中に飛んだ。

「あのくたばりヤロウを縛り上げたか？ ひとつ運んでこい！」

「校長にするかい、それとも歴史の教員にするかい？」

「校長だ！」

私は心臓が口から飛び出すほどびっくりした。もともと校長と教員を解剖していたんだ(註15)。

この目撃した驚くべき事実について、さらに次の第十八回すべてを使って小蝸が長々と説明を加える。「学校の現状」という点でまとめれば、概略は以下のようになる。

新教育制度が初めて施行された頃、我々の学校にも等級があり、一步一步試験を受けて、その後でやっと卒業ということになった。二百年の改善と進歩を経て、しだいに試験が廃止された。およそ学生であれば、授業に出ようが出まいが、時期が来れば卒業になった。授業に出ようが出まいが卒業できるなら、いっそのこと入学したその日に卒業ということにしようということになった。やがて、小学校、大学の区別を廃止し、学校はすべて最高学府となる。だから学校に入学したその日に大学卒業となり、卒業証書がもらえる。教師も大喜び、教師は皆大学教師となる。学生も、父兄も大喜び、学校はみな最高学府、学生は皆首席、なんで光栄なことだ。みんな満足した。大学卒業者が増える。だ

から、猫国は世界のなかで最も大学卒業者が多い。

学校制度の中にも無意識に猫人の『獣性』が入り込んでいくことがある。猫人の『獣性』の一つに怠惰というものがあった。だから努力を嫌い、楽な道を選んでしまう。しかしながら、もう一方では自己中心的であり、利益に対しては非常に食欲である。この性格が学校制度に入り込んできたとき、学校制度はどうなるか。この場面はまさしくこの表現である。

試験はいやだ、授業にも出たくない。だが卒業はしたい、卒業証書も手に入れたい。この猫人の『獣性』を押し進めて行ったのが、猫国の学校である。この猫人の『獣性』の究極のスタイルが、入学したその日に、みんな首席で卒業させることである。

もともと、学校は、『卒業証書』『首席』などとは無関係のところにあるのではないか。では、学校はもともとどういふところかと言えば、非常に抽象的ではあるが、例えば、学校は、学生達に『学問を究めさせる』場所であると言えるかもしれない。そして『学問を究めた』人物に与えられるものが『卒業証書』であり、最も『学問を究めた』人物が『首席』である。だが、本質から言えば、この『学問を究める』ことと、例えば『卒業証書』などは、本来は、全く別物である。実際には、『学問を究め』ればよいのであって、学校の表面上の形はいつでもよいのである。

にもかかわらず、現実には、この二つを同じものように見られがちである。だが、この二つは実際は違うのだということを、学校制度の中に猫人の『獣性』を入れ込ませることによって明らかにしている。

では何故猫人が『獣性』のみであることによって、学校が本来根本に持っていなければならない『学問を究める』という部分が抜け落ちてしまうのか。なぜなら、ほんとうに『学問を究めよう』と志すとすれば、もしかしたら一生かかってでもやれるかどうかわからない期間の、並大抵ではない努力が必要とされるからである。作者

は、この態度を取れるところに、人間が他の動物とは違う条件としているのではないか。だがこの努力は猫人の『獣性』から最も遠いところにある。

しかし、この猫人の性格は我々人間がしばしば陥る弱点である。例えば、学校は『卒業証書』を貰う場所であるとし、その『卒業証書』をできることなら何の苦労も経ずに手に入れたい考えたりしないだろうか。

確かに『最高学府』『大学卒業証書』『首席』などは、極めて魅力的な言葉である。できることなら何の苦労も経ずに手に入れたい。この気持ちは人間であれば誰も持つ。実は、この人間の考え方を突出させたのが、猫人の『獣性』である。そしてこの種の欲求を完璧に実現したのが、猫国の学校なのである。

現実では、猫人の『獣性』は、眼に見えない形でソッと入り込んでくる。時には入り込んでいるとも気づかないのである。人間誰もこのような内なる「猫人」の言葉にいつも囁きかけられている。だが、この「猫」の言葉に傾けば、たちまち猫人になってしまい、「猫国」建設に協力することになるのである。

作者はこの人間の弱点を指摘しているのである。人間であれば誰もが、ここに陥る危険性を持っており、ここに陥った人種がどんな結果になるのかを実際に作品世界で描き出しているのである。

④ 猫国の新教育の崩壊

猫国に学校制度が導入されると同時に、新教育も入ってきた。しかし、学校のなかで行われるべき新教育は、猫国に入ると変質し、崩壊してしまった。この新教育の崩壊の根本原因を、小蝸の言葉として以下のように語る。

あなたは、この新教育の崩壊の原因が何処にあるのかをお尋ねですか。私は答えることはできません。ですが、ただ、人格がなかったからだと感じています。いいですか、新教育が初めて入ってきたとき、人々は何のためにそれを求めたのでしょうか。

みんなはできるだけ多くの金を儲けようとしたのであり、子弟にできるだけ多くの物事を解らせようとしたのではなかった。できるだけ新しく使いやすいものを造りだそうとしたのであり、人々にできるだけ多く真理を解らせようとしたのではなかった。この態度が既に、教育から良好な人格を養い、研究精神を養うという主旨の一部分を失わせた。新しい学校はできるに及び、人はいたが、人格はなかった。教員は金を稼ぐため、校長は金を稼ぐため、学生は金を稼ぐ準備をするため、みんなは学校を一種の新式の飯櫃であると見なした。何が教育であるかを問う人は誰もいなかった。国家が衰弱し、社会が暗黒になるにつれて、皇帝は人格をなくし、政治家は人格をなくし、人民は人格をなくした。ここに於いて、学外の人格のなさが、学校の人格のなさに染料を加えることになったのです^(註16)。

教育の崩壊の原因を『人格』のなさにあったのではないかという。

もともと真の新教育が目指すところは、物事の善し悪しを判断できるような良好な人格を養い、また真理の追求といった研究精神を養うといったものであるとする。

ところが、猫人の『獣性』がこの新教育に入り込んだ結果、新教育は変質してしまう。

猫人の『獣性』からすれば、猫人は怠惰でありながら、かすかな利益にも極めて貪欲である。しかも中己中心的で、他人のことなど少しも考えたりしない。だから、新教育の導入に当たって、新教育を金儲けの対象としてしまうのである。

金を儲けてもらうために、親は役人や教師にしようと学校で教育を受けさせる。(猫国には会社はなく、学校を卒業した人の職業は教師か役人しかない。)子供も金儲けのために、いいところに就職しようとして学校に行く。金儲けのために、教員や校長も学校に務める。ここでは教育の内容は問題にならない。子供たちにどのような人間になって欲しいかの視点もない。学校は金になるという視点だけである。したがって学校内の教員、校長、学生の争いも利益を求め

る争いであり、これがエスカレートし殺し合いになる。

この猫の『獣性』から出てくる極端な金儲けにたいする執念、この対極に置かれているのが『人格』である。

『人格』とはいなかるものか。これに対する直接の説明はない。だが、ストーリーの流れから推測はできる。流れからすると『獣性』の対極に位置するものであるから、怠惰でなく、自己中心的でないものを含むものであると考えられる。したがって、前の引用文に続いて『人格』の回復を以下のように述べる。

もちろん、この貧しく弱い国家の中であって、多くの人が腹いっぱい食べることさえできない。こういったことが人格を論じることをたいへん難しくしています。人格はほとんど経済的圧迫より墮落したものです。それは間違いありません。でも、これは教育に携わる人々の弁解としては不十分です。なんのために教育が必要なのでしょう？ 救国のためです。では、どのように救国するのか？ 知識と人格によってです。このことは、ひとたび教育に携わったときに肝に命じるべきであり、このために、ひとたび校長や教員になろうとしたときに自分の小さな利益は犠牲にすべきなのです。恐らく私は教育に携わる人に期待し過ぎるのかもしれませんが。人はつまるところ人ですから、教員だって娼婦と同じように飢えるのは恐ろしいものです。私は恐らく教員だけを責めるべきではなく、確かに教員だけを責めるつもりもありません。ですが、女性の中には飢えたって娼婦になることを承知しない人だっています。だとすれば、教育に携わる人もまさか歯をくいしばって人格のある人になることができないことがありますでしょうか^(註17)。

教育は救国のためであるとし、最も重要な役割を果たさなければならないのは教育に携わっている人であるという認識が示される。これらの人々は少なくとも救国の決心をし、このために自分の小さな利益を捨てなければならない。これが必要最小限の条件である。

それにはまず教育に携わるものが『人格』を持たなければならない。そして、たとえ食えない状態であっても教育に携わる者は『人格』を

失ってはならない。

このようにして教育に携わる者が『人格』を持てば、社会の『人格』は回復する道が開けると言う。

もちろん、政府は真面目な人をよく欺き、教育に携わる人も真面目であればあるほど、欺かれます。ですが、どんなに悪い政府であっても、少しぐらい民意を顧みようとするでしょう。もし教育に携わる人に本当の人格があり、養成した学生達にも人格があれば、社会も永久にめくらのままで善し悪しが判らないなんてことがありますか。社会が教育に携わる人が慈父のようであることを知り、養成した学生が社会でいくらか成果を挙げれば、政府が教育を軽視するでしょうか。絶対に経費を出さないってことがあるのでしょうか。私は十年間の人格教育で猫国は様子を変えたと信じています(註18)。

『人格』のある教師が『人格』のある学生を育てる。この学生がさらに『人格』のある人を育てる。そうすれば、社会に『人格』が広がり、社会も良くなる。この『人格』教育を支えているのは、『人格』を持って粘り強く教育に当たれば、いつか誰かが解ってくれるというひたむきな信頼である。

ここには、対立、衝突という方向性が排除されている。だが、例えば、『人格』のある教師が『人格』教育をした結果、ますます『人格』のない政府と対立することはないか。教師に『人格』があり、『人格』教育をすれば、学生は『人格』を持つことになる。この結果、『人格』のない教師や学生と対立することはないか。

作者の『人格』には、この種の視点が排除されている。このような衝突、対立という方向に向かうところにはないのである。むしろ衝突、対立に向かう感情を無条件に『獣性』と捉え、この感情を押さえ、ひたすら人間の善意を信頼できることができるところに、人間が「猫」に優ると考えているようである。たとえ「正義」という名の下であれ、相手に拳を振り上げてしまえば、つまり憤りを暴力という形で表してしま

えば、それはもう『獣性』であり、必ず「正義」などとは無関係の殴り合いとなり、それはしだいにエスカレートし、やがて必ず殺すか殺されるがになってしまうと認識があるように思われる。

だが、小蝸の述べる、この『人格』による猫国再建の方法は『獣性』の正反対に位置するものであり、作品に出てくる猫人にはほとんど不可能に近く、発言自体が無駄のように思われる。にもかかわらず、なぜ滅亡に瀕した猫国の再建法を小蝸に語らせるのか。このことを、作者が、小蝸に自国を思う余り、無駄だと知りつつ、さしあたり救国の糸口を敢えて発言させることで、「猫」と人間の違いの線を引いて見せ、読者に猫人の道を辿らないことを願う、この気持ちの表れであると感じたい。

猫人の教育に『人格』がなかった結果、猫国の学校現場はどのようなになってしまったのか、小蝸は以下のように述べる。

この二百年の間、毎日、校長が校長か教員を殴らないなら、教員が教員か校長を殴りました。学生が学生を殴らないなら、学生は校長か教員を殴ったのです。暴力は人をたちどころに獣に変えます。一回殴れば野生が少しづつ増加していきます。だから、現在では、学生が校長教員を解剖することなど当たり前のことになっているのです。でも校長教員のために不公平感を抱く必要はありません。我々の教育は輪環教育ですから。……(略)……学生が校長教員を打ち殺すのは天の理からして明かであり、学生たちが校長になればまた打ち殺されるのも理の当然です。これがまさしく我々の教育なのです。教育は人を野獣に変えることができます。何の成果も挙げてないことはないのです。ハハハハ！(註19)

この種の恐怖で、学校、教育の問題は閉じられる。作品の効果から言えば、この恐怖が大きければ大きいほど、逆に『人格』の重要性が思い知らされることになる。

この作品では、猫国の滅亡という極限状態に至る過程で、『人格』のなさがどのような作用を果すのかを拡大、誇張して描き出す。だが、現

実の日常生活の中では、むしろ眼に見えないところで『獣性』は人間の心にしばしば進入し、『人格』を蝕むのである。

そもそも、『人格』の領域は眼に見えないのである。外見からでは、『人格』のある人物も、『人格』のない人物も同じに見える。だから『人格』がなくとも『人格』があるような顔もできる。もちろん逆に『人格』がある人物は、自分に『人格』があるなどと主張はしない。

また、『人格』教育というものの、『人格』のある教師の教育も、教育一般がそうであるように、すぐに結果がでるというものではない。だから、『人格』のある教師の教育も、『人格』のない教師の教育も、現実には、ただちには区別し難い。

さらに、『人格』を持とうとするか、捨てるかは、その人自身に任されているという部分もある。

しかも、『人格』を持って真の教育を実現しようとすれば、金銭を越えた、教員の善意、良識を伴う、人知れず行う、並大抵でない努力が必要とされることが想像される。

それなら『人格』はどうせ見えないし、評価だって難しい。だとすれば『人格』の部分が苦勞するより、いっそ『金のため』だと割り切ってしまった方がよい。この方が楽だ。人間の「心」がここに至るのは容易である。

この作品で作者の本当に問題にしたかったのは、人間の、このような部分なのではないか。このようにして『人格』を失ってしまったのが、実は猫人なのである。

最初は、ほとんど無意識に、眼に見えない形でこの『人格』が失われていくことがあるだろう。だが、一端失われてしまうと『人格』のなさが次々に影響を及ぼし、『人格』を侵食していく。作品ではこれを衝撃的な形で証明させているのである。

⑤ 若い学者

「私」は、陽気で活気もある若い学者に期待を

抱いて会って話しをする。だが、「私」は彼らの話しを聞いたけれど、彼が何を言っているのかさっぱり理解できなかった。このことを、小蝸に訴える。これに対する小蝸の説明である。

「ホワラフスキー？ ほかにトントンフスキーもありました、聞こえたでしょう？ たくさんあります。彼らは一連の外国の名詞を話し言葉に挿入するのです。他の人だってわからないし、彼ら自身だって理解できない。ただ聞いて賑やかであればそれでよいのです。こんなふうな話しができるのがつまり新式の学者なのです。……（略）……彼らにまた会ったとき、ただ出鱈目に、ホワラフスキー、トントンフスキー、みんなフスキーとか言ってご覧なさい。彼らはあなたが学者だと思わせよう。」^(註20)

猫人の若い学者の知識は、単に新しく、難解な言葉をちりばめた表面的なもので、中身は何もない。

さらに、猫国の若い学者は、「私」の穿いているズボンに異常な興味を示すが、この点についても小蝸は、「見ててご覧なさい、何日したら若い学者は必ずズボンを穿きますよ」^(註20)と言う。この言葉にも象徴的に若い学者の知識のあり様が表われている。

つまり、人間の中身とズボンの関係から言えば、彼らにとって知識というものは、人間の中身を問題にするのでなく、もともと猫国ではズボンを穿く習慣がないのに、敢てそれを穿くことで満足する類のものと考えられる。いわばファッションのようなものである。外見的なもの、例えば眼にこころよいもの、これこそが猫の若い学者の求めている知識なのである。

この猫人の若い学者の知識の描写には、真の知識とは何かの問いかけがある。

知識にもいろんなレベルがあるのではないか。他人が知らないことを知っているレベルで「知識」ということできるかもしれない。だが、これを「真」の知識とは言えないだろう。

だとすれば、真の知識とはいったいどのようなものか。

真の知識は、知っている知らないレベルの「知識」を越えたものであるとひとまず言えるのではないか。だとすれば例えば真の知識と「知識」との関係は、前者をA後者をA'とすれば、『 $A=A'+\alpha$ 』とできるのではないか。知ってる知らないレベルの「知識」に「何か」が加わってこそ真の知識と言えるように思われる。

この場面には「何か」の言及はない。ただ猫人の若い学者は「知っている」ことで、他人に対して優越感を持っている。この態度には人々に対する思いやりはない。あるのは自分のみである。これは猫人が自己中心であり、自分の利益のみ追求する性格と一致する。したがって、そうではない「何か」である。

場面が変わって、「私」が古物院に行ったことである。

「知ってる」レベルの「知識」がファッション的なものであればまだ良い。だが、ここでは、この種の「知識」が自己利益の貪欲な追求と結びついたとき恐ろしい事実を生み出すことを指摘する。若い学者に「知識」があるが故に、古物の価値を充分知っている。この「知識」を利用し価値のあるものをかたっぱしから外国に売り飛ばすことをやっていた。

この事実を知り愕然とし、「私」は古物院の若い学者の「知識」について以下のように語っている。

猫国の新学者が外国に行き、見たり聞いたりしてきたのは、最新の排列方法だけだったのです。彼らにはもともと少しの判断力もなく、もともと何が良く何が悪いのか理解してないのです。ただ聞いてきた少しばかりの排列法で飯を食っているのです。^(註22)

ここには若い学者の「知識」に欠けている「何か」の一つが明らかにされている。

⑥ 政治変動の歴史

第二十一回で「政治変動の歴史」を小蝸の口から述べられている。この項では猫国の「政治変動」がどのようなものか見てみよう。

作品では猫国の「革命、改革」はもともと外国から持ってきたものである。だが、これは猫国に入ったとたん変質し「閥」になってしまったと言う。

まず、この作品で「閥」とは何かを説明する部分を見てみよう。

「……(略)……もともと私たちのところにあったものではありません。私はあなた方の地球にこの種のものがあるか知らないんですが、いや、これはものではなく、政治団体の組織で——みんなが連合して、ひとかたまりになり、ある種の政治主張と政策を擁護するのです。」

「あります、私たちのところと言う政党です。」

「いいんです、政党であろうが、ほかの名前であろうが、どのみち私たちのところに来れば閥と改称されるのですから。……(略)……」^(註23)

「閥」に日本語を当てるのは難しい。

原文の「閥」は名詞でも動詞としても使われている^(註24)。

文脈から言えば、「閥」は、名詞である場合、ある種の弱点をもったを「政党」「会」といったような団体であるし、動詞で使う場合、むしろ集団で行うある種の弱点を持った「運動」「革命」というようなもののように思われる。

この項では、一応「閥」という字をそのまま使い、猫の国の「閥」にどの種の弱点があるのか、を考えていく。

以下は小蝸がさらに「私」に語った「政治変動の歴史」である。

この作品では《参政閥の時代》というものから説かれ始める。

人民が政治に参加できると聞き、人民たちは政治に参加できるように皇帝に要求する。だが、この「参政閥」は重要人物が官に封じられたことで、その人物が「閥」の仕事の方はすっかり忘れてしまい、「参政閥」は消滅する。「参政閥」が失敗したのは、「参政閥」の指導者が役人という餌に食いついたからである。

次に出されるのが《民政閥の時代》である。人々は、皇帝をなくすことができるという話を

聞き、また「関」が始まり、皇帝を追い出そうとする。ところが、皇帝は金を与えて自らの「関」を作り、「民政関」に対抗させた。皇帝が自分の「関」に一千国塊の金を与えたことを聞き、「民政関」の人たちも立場を変え皇帝に忠誠を尽くすことになり、皇帝から金を受け取り、「民政関」は消滅する。

この結果、庶民や国家はどうなったか。

ひとたび関が起こったときはいつも、みな口々に国のため人民のためと言う。だが、ひとたび役人になれば、皇帝より金が支給されることになるのですが、皇帝の金はもともと人民から出たものです。役人になれなかったものは、命がけで関をするのですが、まず人民をだまし金を出させるのです。人民が騙されなかったら、軍人と共謀し、人民を搾取するのです。したがって、関が多くなればなるほど、人民はますます苦しみ、国家はますます窮乏するのです^(註25)。

「参政関」「民政関」の、この種の動きは、人々の生活を良くしようとか、国を立派なものにしようといった部分を欠き、結局、自分の利益を優先させるものだったのであった。

革命・改革のための運動をすることが必ずしも『人々の生活を良くするため、素晴らしい国を作るため』でない場合もありうる。

作品で作者は『獣性』に支配された猫人が「運動」「革命」を出世の足掛かりにしたり、簡単に、いや進んで金で釣られたりする事例を挙げる。そうして、確かに『人々の生活を良くするため、素晴らしい国を作るため』の気持を持たなくとも外から見て「運動」らしいことはできるし、「革命」らしく見えるものはやれることを証明してみせる。これが、猫国の、何回やっても成功しない、いわゆる「運動」であり、「革命」である。

もちろんこれは本来の「運動」とも「革命」とも違う。本当は表現のしようがないものである。だから、この部分を、作者はこの作品で「関」と称しているのではないか。

こうなると、「運動」から必然的に生じるのは混乱と破壊のみである。混乱と破壊が起これば、

さらにもっと『獣性』は進入しやすい。この混乱や破壊に乗じ、或いはこの状態を利用し、よこしまな企て、行動を取るものが必ず出てくる。その結果、庶民の迷惑、犠牲を引き起こし、さらには国家の衰退をもたらしかねない。

この描写から、じつは「革命」「運動」に参加している事実からさえも本当は『人々の生活を良くするため、素晴らしい国を作るため』の気持ちに基づいて行動しているのかどうかはわからない、という点に気づかされる。「参加」していることだけではわかりようがない。外見からはわからないのである。だとすれば、確かに『人々の生活を良くするため、素晴らしい国を作るため』の気持がなくとも参加できることも一つの事実なのである。たとえ認めたくはなくとも、これも人間の一面を正しく捉えているといえるのではないか。

そうして、何年間かの「関」の結果どうなったかについて、小蝸は以下のように述べる。

こうして、「関」をして何年間かが経った、この結果ただ二つの明かなる現象があった。第一、政治は変動があっただけで、改革はなかった。こんなふうだから、民主思想が発達すればするほど、民衆はますます困窮した。第二、政関が多くなるほど、青年達は浮薄になった。みんなは政治だけを見て、学識をかまわなかったからです。だから、たとえ救国の志しがあって政権を取ったとしても、ことに臨んで眼を白黒するだけでした！備えているべき能力と知識がなかったのです。こうなると、老人達は我が意を得たりとばかり喜んだ、老人達も青年達同じように知識はなかった。だが、処世の悪知恵は青年達より数段優っていた^(註26)。

猫国の「改良・革命」は実は何も改良・革命していなかった。結局、老人たちのやり方に従ってしまうことになってしまった。つまり、何年か前の「関」が起こる前のやり方に還ってしまったのである。この原因がどこにあったのかについて、「知識と能力の欠如」を挙げている。

作品ではこれ以後さらに《みんなフスキーの時代》を設定し、これについて述べる。これも

結局「何年間か、みんなフスキーをしたが、殺人以外に、ただ、すべての人は眼を白黒するばかりであった。結局、みんなフスキーの首領が皇帝になった。」^(註27) となり、また最初の振り出しに戻るのである。さんざん犠牲を払い、大騒ぎしたにもかかわらず、根本的には何も変わっていないばかりか、却って廃虚と混乱を残したという指摘には「寒け」すら感じる。

そして、この政治変動が結局失敗に終わった原因について、以下のように述べる。

今の国の人々の革命は新しい主張、新しい計画を行うことにある。だが、我々の革命はただ『関』のためだけのものだった。なぜなら、知識がなかったからです。知識がなかったから、対事から対人に変えざるを得なかった。対人であるから、人々は革命事業にあるべき高尚な人格を忘れてしまっ、互いに攻撃し合い、最も卑劣な手段を用いた^(註28)。

この部分にも失敗の理由として『知識』の欠如が上げられている。『知識』のない革命は人を陥れたり、人殺しに向かう可能性を指摘する。

このことから解るように、ここで作者は国を作るためにまず必要なものとして、一貫として『知識』の必要性を主張している。この根拠として、もし革命が建設であるなら、建設に必要な『知識』がなければ、革命を何百年何千年やっても、革命は完成することはないとする。簡単な論理であるが、これは否定できない真実である。

しかし、これを実行するのは容易ではない。国の建設のための『知識』の獲得は威勢も良くないし、華々しさもない。しかも、『知識』の獲得には短時間の決着という見通しはなく、長い時間の、人知れず行う個々人の努力が必要である。猫人がこのことやれないことは再三述べたとおりである。

だが、やれなければ、どのような国であれやがて猫国と同じ運命を辿ることになる。作者は抜き差しならない極限状態を設定し、読者に「滅亡か」それとも「救国か」この選択を迫っているのである。そして、「救国」のためには、何を、

どのように克服していかなければならないか、作品の底に流れる作者の主張は一貫している。

四

この作品は従来「新しい試みをしたのにもかかわらず、その作品が『時事評論』のようでもあり、三流の『社説』めいたものになった」^(註29)と見られる。確かに、この作品で扱う事柄から中国の過去の歴史、当時の社会風潮を連想させる。しかも、この作品で扱われている学校紛争、その記述は全くの真実という評価もある。^(註30) 作品の評価としてこの指摘も妥当なものがある。だが、この評価に留まっては、作者がこの作品を書くことで、何を主張したかったのかという部分が見えてこない。

もしかしたら、この作品に描き出されている猫人社会の個々の状況、その社会の悲惨さ、腐敗そのものだけが、作者がこの作品で最も指摘したかった問題ではないのではないのか。これらはあくまで結果としての現象であって、それを引き起こすものこそが作者が最も問題としたかったのではないのか。では、その社会の悲惨や腐敗を引き起こすものは何か。それは猫人の突出した怠惰、自己中心性である。筆者はこれを仮に『獣性』と称した。

そこでさらに、『獣性』との関わりから作品に取り上げられている出来事の一つずつ考えていくと、それぞれの出来事の根底に、ある種の一貫した傾向があるように思えてくる。取り上げられている問題を掘り下げれば掘り下げるほど、行き着く先は『獣性』に傾いてしまう人間の「心」の部分に関わるものであるように思えるのである。

作品では拡大され、誇張され『獣性』に支配されている人間が描かれてはいるが、実際の日常生活に於いては、『獣性』は他人の眼からは見えないところでソッと人間の「心」の中へ進入してくるものなのである。例えば、心の中でチョットとした油断から或いは無意識にわずかば

かりの怠惰を選択してしまう。もちろんこれから引き起こされる弊害はほんのわずかなものである。或いはもしかしたら何の弊害も起こらないかもしれない。日常生活のレベルではここで終わるはずのものである。だが作者はここで終わらせず、さらに、そのほんのちょっとした怠惰を多くの人が選択するようになると、社会はとんでもないことになってしまうと展開してみせるのである。この展開で、作者は「チョットした」油断、「無意識」とか「わずかばかり」の怠惰といった部分を激しく糾弾しているのである。

ではこの摘発の根本には何があるのか。『獣性』のみの猫人が作っていた猫国はついには滅亡してしまう。この結末から考えるに、猫人の『獣性』は否定されていることになる。このことで作者は人間が人間であるための条件、人間が他の動物と違うところ、或いは人間が国を存続させていく条件は、少なくとも動物的な本能、つまり猫人が持っているような『獣性』を制御、抑制さらには克服できるところにあると言うことを示したかったのである。しかも、少なくとも国を建設して行くためには『知識』も必要であるとする。だから摘発の底には、救国が命題である場合、結局、一人ひとりが自ら努力し修め、その修めたものを活用することによってしか国を救うことができないという信念に似た作者の思いが流れている。

また作者は、この『猫城記』を自らもともと「風刺」作品として描いたと言う^(註31)。

では、この作品が風刺作品であれば、彼自身でも「ユーモア」作品と称してる従前の『老張的哲学』『趙子曰』など^(註32)と何処が違うのか。

最も大きな違いは人間の、本能に近い欲望の描き方である。作者は「ユーモアには同情がある」^(註33)と言う。事実「ユーモア」作品と称せられる従前の作品では、ある場面では弱点になるかもしれない人間の欲望を描く場合、必ず「笑い」を伴い、結果として宿命的なしかたなさのような印象が現れる。少なくとも、この種の欲

望そのものを全面的に否定することではなく、その欲望を行使することで、結果として現れる悪い部分を問題にする^(註34)。ところが、この作品では、この欲望さえ、全面的に否定するのである。この結果、この作品では、『獣性』は人間が人間として存続し続ける限り逃れ難いものであるとか、『獣性』のいくつかは人間が存続して行くためには必要なものであるとかの雰囲気掻き消されている。もし人間に『獣性』があるのは当然であるとすれば、この作品には人間に対する「同情」はないといえる。

ここに、老舎という作家の「風刺」と「ユーモア」の描き分けを見ることもできるのではないか。

ただ、この作品での主な登場人物は、教育に携わる者、政治家、学者、学生、政治活動の指導者等であり、いわば社会の構成においては指導的立場に居たり、将来そうなる人々であることには注意して置くべきであろう。そもそも「私」の親友の小蝎という人物は政府の文化教育の最高位のポストに就いている。従前の作品の人物たちが我々の身近にいるような人物に比べると、社会的地位が高いのである。この点も「ユーモア」→「風刺」の変化といくらか関係あるのかもしれない。

おわりに

この作品で扱われている問題は、決して新しいものではなく従前の作品にも散在する。だが、この問題の取り組み方や表現法が大いに異なる。とくに猫人に『獣性』のままに行動させ、これが極端なまてになったときの光景は、衝撃的であり、迫力もあり、同時に説得力もある。

したがって、この『猫城記』を読めば、猫人に同情したりあきれたり、果ては軽蔑したり嫌悪したりすることになる。だがよくよく考えると、我々人間にもこの種の猫的性格はある。だとすれば、猫人を嫌悪するということは、人間の、猫的性格の部分を嫌悪することであり、ひ

いては自分自身を嫌悪することにつながる。つまり、読者に、読者自身を含めた人間の嫌悪すべき部分を暴き出してみせるのである。それ故、この暴露が深刻であればあるほど、核心に迫れば迫るほど、その事実を認めたくない、その事実に触れて欲しくない読者は嫌がるに違いない。この作品が、今でも、ある種の人々に嫌われ遠ざけられているということは、作品の性格からすれば、この作品は充分成功しているということになるのではないと思われる。

ともあれ作者がこの作品で大鷹の口を借りて「私に偽善の罪状を加えず、彼らは自分自身の誤りを認めるべきである。自分の誤りを認めることは建設的批評なのだから。」^(註35)と言わせるように、たとえ耳に痛い指摘であっても、指摘が少なくとも間違いでないならば指摘を受けとめ自分の考え、行動を正していかなければならない。この態度こそこの作品理解の前提になっているものである。

この作品にいくらか問題はあろう。作品で作者の主張が先行したせいであろうか、小蜷の口を借りて行う説明、演説がいささか多すぎるような気がする。^(註36) また、作品の終わり方も、猫国を外国の侵略という要因を使い全滅させることによって作品世界を閉じてしまうが、いささかあつけな過ぎはしないか。

注

テキストは『老舎文集七』に収められている『猫城記』を使用し、『現代』に掲載された『猫城記』を参照した。日本語に翻訳したものには『老舎小説全集四 猫の国 牛天賜物語』(学研)、『猫城記』(サンリオ SF 文庫)などがあり、前者は日下恒夫氏、後者は稲葉昭二氏が訳されている。訳出に当たって参照した。

- (1) 「編輯座談」に以下の記載がある。「从下一期起, 将开始登载老舍先生为本刊特撰的长篇小说『猫城记』。老舍先生的文章, 凡读过他的『老张的哲学』『赵子曰』『二马』者, 都佩服他的幽默, 耐人寻味, 这部『猫城记』的内容, 据他来信所说, 是:『中国人——就是我呀——到火星上探险。飞机碎了, 司机的也死了, 只剩得我一个人——火星上的飘流者。来到猫城, 参观一切, 还遭了多少

的险难……火星上真有什么? 谁知道呢? 火星上该有什么? 听我道来。就是这么回事。』好, 究竟这是如何的妙文, 亲爱的读者等着自己去鉴赏吧。」発表当時の編輯者の老舎に対する期待、老舎の作品に対する自信が感じられるような気がする。

なお、老舎は1930年のはじめに帰国した。帰国後、『大明湖』と題する小説を書いた。だが、この『大明湖』は完成し商務印書館に送られていたが、1932年1月28日の上海事変の際に商務印書館日本軍の爆撃によって破壊され、作品の控えを取っていなかったため、この作品は完全に消滅してしまう。記憶を頼りに同じ作品を再び書くように勧められたが、書くことはなかった。('我怎么写《大明湖》') この大明湖の消滅の後に書かれたのが『猫城記』である。

- (2) 『老舎小説全集四 猫の国 牛天賜物語』(学研)の「解説」
 (3) 『老舎文集七』の『猫城記』「十一」p. 358の最初の行。以下『猫城記』のページ、行はこの文集のものである。
 (4) 『猫城記』「六」p. 330の最後の行。
 (5) 同上, p. 331 L10.
 (6) 同上, L19.
 (7) 同上, L21.
 (8) 『猫城記』「六」p. 332 L14.
 (9) 同上, L16.
 (10) 『猫城記』「七」p. 335 L3.
 (11) 『猫城記』「十」p. 356 L13.
 (12) 『猫城記』「十五」p. 391 L24.
 (13) 『猫城記』「十四」p. 337 L9.
 (14) 『猫城記』「十七」p. 394 L21.
 (15) 同上, p. 395最後の行。
 (16) 『猫城記』「十八」p. 404 L6.
 (17) 同上, L15.
 (18) 同上, L24.
 (19) 『猫城記』「十八」p. 405 L16.
 (20) 『猫城記』「十九」p. 413 L21.
 (21) 同上, p. 414 L7.
 (22) 『猫城記』「二十」p. 419 L19.
 (23) 『猫城記』「二十一」p. 424 L12.
 (24) この『猫城記』を日本語に翻訳されたものを見ると、「関」を訳出する際、稲葉氏は「馬鹿騒ぎ」と注し、「関」をそのまま使い、日下氏は「騒」という日本語を当てる。
 (25) 『猫城記』「二十一」p. 425 L15.
 (26) 同上, p. 426 L7.
 (27) 同上, p. 427 L23.
 (28) 同上, p. 427 L19.
 (29) 同(2)
 (30) 杉野元子「老舎と学校紛争——『趙子曰』を基軸として——」(『日本中国学会報第四十三集』p. 231~p. 246.)

氏は老舎がどうして学校紛争に批判的で

あったのかについて以下のように述べている。「伝統と秩序と安定を好む庶民の感受性と倫理感を血肉のなかに受け継いでいる老舍には、祥子のような庶民に対する深い愛情とともに、それを表裏をなす形で、過激な紛争を事とする学生への厳しい批判意識が存在していたのである。」（p. 244）

- (31) 「我怎么写《猫城记》」（『老舍研究资料』P544～P548）に「《猫城记》根本应当幽默，因为它是篇讽刺文章」とか「我是写了篇讽刺。讽刺必须高超，而我不高超」或いは「我故意的禁止幽默，于是《猫城记》就一无可取了」と書いている。このような表現から、老舍は、この『猫城記』をもともと風刺作品として書こうとしていたことが明かである。
- (32) 例えば『老張的哲学』については「我怎么写《老張的哲学》」（『老舍研究资料』P521～P525）で「我失了讽刺，而得到幽默」と述べ、『趙子曰』は「《趙子曰》是老張的尾巴」であり「在精神上实在是一贯的」とする。
- (33) 同上の「我怎么写《老張的哲学》」で「ユーモア」

について、さらに「据说，幽默中是有同情的。我恨坏人，可是坏人也有好处：我爱好人，好人也有缺点」と説明している。

- (34) 筆者は以前、作品を「『笑い』がある」という視点から作品を考えたことがある。「老舍『老張的哲学』私論」（集刊東洋学 57）「老舍『趙子曰』試論」（八戸工業大学紀要第 9）を参照

ちなみに後者の論文では「（『趙子曰』にある）『笑い』には人間が人間として生存して行く限り永遠に持ち続けるであろう愚かさのようなものが含まれていると考えられる。そして同時に、この種の『笑い』から、人間だれしも同じであるという同情、ある種の仲間意識、親近感が生まれてはいないだろうか」と考えた。

- (35) 『猫城記』「二十三」p. 439 L12.
- (36) 日下氏は（2）の文章で「演説」に触れて「半ばを過ぎた辺りから、演説が目立つのは、およそ物語らしくない。寓話の形式を採っているこの作品と合わないのである。形式と中身のアンバランスは、作者の迷いを示しているのであらう」と述べている。